

『ドイツ体操』(Deutsche Gymnastik)における
「動きのゲシュタルトウング」(Bewegungsgestaltung)について
— O.F.ボルノーの「課題としてのゲシュタルトウング(Gestaltung)」を手掛かりにして —

菅井 京子 (びわこ成蹊スポーツ大学)

Über die Bewegungsgestaltung in der “Deutschen Gymnastik”
Anhand von O.F.Bollnows “Gestaltung als Aufgabe”

SUGAI Kyoko (Biwako Seikei Sport College)

Zusammenfassung

Anfang des 20. Jahrhunderts entstand in Europa die sogenannte Gymnastikbewegung, in der man statt des förmlichen Spieß-Maul Systems und der formalisierten schwedischen Gymnastik eine neue Gymnastik suchte. In dieser Bewegung fanden drei wichtige Tagungen, an denen Vertreter aller neuen Gymnastikschulen teilnahmen, statt. Es waren die Tagung für künstlerische Körperschulung 1922 in Berlin, die Tagung zum Thema “Gymnastische Körperbildung” 1926 in Düsseldorf und die Tagung zum Thema “Gymnastik als Menschenbildung” 1931 in München. Diese Tagungen schufen einen starken Zusammenhalt zwischen diesen neuen Gymnastikschulen. Im Jahr 1935 wurde das Standardwerk die “Deutsche Gymnastik”, die zur Richtlinie der neuen Gymnastik wurde, publiziert. In der “Deutschen Gymnastik” wurde das Arbeitsgebiet der neuen Gymnastik, das aus fünf Teilgebiete bestand, aufgezeigt. Das wurde von der Gymnastik H. Medaus übernommen und hat bis zum heutigen Tag bestand. Aber über die Bewegungsgestaltung im Arbeitsgebiet wurde nur wenig beschrieben und es war sehr schwierig zu verstehen.

Ziel der vorliegenden Arbeit ist es, den Sinn der Bewegungsgestaltung in der Gymnastik zu klären. Dabei soll O.F. Bollnow, Gestaltung als Aufgabe, berücksichtigt werden. Der Aufsatz steht im Bericht “IV. Kongress für Leibeseziehung 4.-7. Oktober 1967 in Stuttgart” zum Thema “Die Gestaltung”.

In der neuen Gymnastik wird die Bewegungsschulung oder die Bewegungsbildung durch das Arbeitsgebiet, das aus “Grundschulung der Bewegung”, “Haltungsschulung” und “Bewegungsentwicklung” usw. besteht, verwirklicht. Eines der letzten Teilgebiete, die entstanden sind, ist die Bewegungsgestaltung. O.F. Bollnow schrieb daß Gestaltung nichts tierisches sondern etwas menschliches war. Aber Gestaltung zugleich nicht durch Absicht und Wille, also den Geist beherrscht wurde und keinen Zweck außer der Gestaltung selbst hatte. Das Ziel in der Bewegungsgestaltung ist der gestalthafte organisch-ganzheitliche Fluß der Bewegung. Man will diesen immer mehr vervollkommen.

So ist die Bewegungsgestaltung als reines Kern am Ende der Bewegungsschulung in der Gymnastik. Das wird im Zusammenspiel oder in der Vorführung auf Festen der Gymnastik vollendet. Das verdeutlicht uns, daß Gymnastikveranstaltungen wie die Gymnaestrada, die weltweit stattfindet, sehr wichtige Gelegenheiten nicht nur für die Leistungsvorführung sondern für die Vollendung der Bewegungsschulung sind.

はじめに

20世紀の初め頃、ヨーロッパでは体操改革運動が起こり、それまでのシュピース＝マウル方式の体操や形式化したスウェーデン体操に代わる新しい体操が求められた。このシュピース＝マウル方式の体操やスウェーデン体操は、初期にはそれぞれ独自の道を歩んだものの、19世紀後半には合理的な体操としてヨーロッパ各国に普及し、さらに世界各国に伝えられた。当時の自然科学万能の合理的精神に基づくこれらの体操は、幾何学的で形式的な集団運動の堅苦しいものが支配的であった。その後、このような体操に対して、あまりに形式的、人為的であり、まるで鋳型にはめられた操り人形のようなものであるという批判¹⁾が高まり、体操改革運動が起こり、形骸化した体操に魂(命)を吹き込むことが目指された。

この体操改革運動の流れのなかで、新しい体操の諸派が集まり3つの大きな会議が開かれた²⁾。「芸術的な身体修練のための会議(Tagung für künstlerische Körperschulung)」(1922年、ベルリン)、「体操的身体陶冶(Gymnastische Körperbildung)の会議」(1926年、デュッセルドルフ)、そして「人間形成としての体操(Gymnastik als Menschenbildung)の会議」(1931年、ミュンヘン)である。これらの活動を通して新しい体操の諸派は強く結びついていった。そして、1935年にF.ヒルカーによって『ドイツ体操(Deutsche Gymnastik)』³⁾が公にされ、新しい体操の拠り所となる指導要領が作り上げられた⁴⁾。この『ドイツ体操』に示された「体操の研究領域」の内容はH.メダウ(Hinrich Medau, 1890-1974)の体操を経て、今日まで引き継がれている。

しかし、『ドイツ体操』に示された5つの「体操の研究領域」のうち5番目に提示されている「動きのゲシュタルトウング(Bewegungsgestaltung)」⁵⁾については、体操改革運動の当時から記述も少なく、大変わかりにくいものであった。本研究では、「ゲシュタル

トウング」をテーマにして1967年にシュトゥットガルトで開催された第4回体育専門家会議の報告書のなかからO.F.ボルノーの論文「課題としてのゲシュタルトウング(Gestaltung)」⁶⁾に焦点をあて、それを手掛かりにして『ドイツ体操』やその後に引き継がれた体操の研究領域「動きのゲシュタルトウング(Bewegungsgestaltung)」の意味を明らかにする。用いる主な資料は、『ドイツ体操』、『新しい体操(Moderne Gymnastik)——メダウの教授法』⁷⁾および「課題としてのゲシュタルトウング」である。

I. ドイツ体操の研究領域に掲げられた「動きのゲシュタルトウング」

『ドイツ体操』に提示された「ドイツ体操の研究領域」⁸⁾の具体的内容は、「動きの基礎修練(Grundschulung der Bewegung)」、「姿勢修練(Haltungsschulung)」、「動きの発展(Bewegungsentwicklung)」、「動きと手具(Bewegung und Gerät)」、そして「動きのゲシュタルトウング(Bewegungsgestaltung)」の5つである。

この「動きのゲシュタルトウング」については、『ドイツ体操』ではほとんど説明されていない。しかし、暗示的に音楽、詩やダンスとの関係に言及されている。ダンスとの関係については次のように述べられている。「地域社会の祝祭のときの運動表現によるコミュニケーションとしてのダンスは、ドイツ体操の課題のなかに含まれる。一方芸術ダンスはそれ独自の芸術的領域に入る。」⁹⁾このように、動きのゲシュタルトウングについては、体操と他の運動芸術領域との共通部分にひとつの大きな可能性が見出されているように思われる。また、次のようにも述べられている。「ドイツ体操は、日常生活の課題だけでなく祝祭のゲシュタルトウングのためにも、ドイツ人の運動感覚や運動能力を訓練しようとするものである。それゆえ、動きのゲシュタルトウングは、パレード、輪舞、運動遊戯、民俗舞踊の準備をすることによって地域社会の祭りを助けることを課題

とする。その際には個人の特別な才能や芸術的な技能を際立たせることではなく、私たちが既にもっている能力、祝祭の体験や祝祭的運動に関する能力を発達させることに重きがおかれる。やってみせることや見物することが重要なのではなく、それに参加すること、共に行うことが重要なのである。¹⁰⁾そして、挿絵として図28「動きのゲシュタルトウング (1922年の運動遊戯)」、図29「動きのゲシュタルトウング (民俗舞踊のステップ)」、図30「動きのゲシュタルトウング (ケルテンの歌)」、図31「動きのゲシュタルトウング (夏祭りの民俗舞踊)」の写真のみが示されている¹¹⁾。このような『ドイツ体操』のなかの記述にあてはまる例を、体操改革運動当時の体操諸派の活動のなかを探すと、R. v. ラバンに行き着く。彼は、「技を競い合うのではなく、参加し、共演する」ということを重要視して、「動きの合唱」を通してコミュニケーションとしてのダンスを展開した¹²⁾。この『ドイツ体操』の他にも当時の著作のなかには、ゲシュタルトウングについて扱ったもの¹³⁾があるが、いずれも難解である¹⁴⁾。

ともあれ、この『ドイツ体操』に示された「動きのゲシュタルトウング」を含む「体操の研究領域」の内容は、のちにH. メダウの体操に引き継がれていく。

II. H. メダウの体操における研究領域

1. H. メダウの体操 (Moderne Gymnastik)

1967年に、H. メダウ (Hinrich Medau, 1890-1974)¹⁵⁾ は、その妻 S. メダウ (Senta Medau) および協力者である J. ホーラー＝フォン・デア・トレック (Jutta Holler-von der Trenck) とともに『新しい体操——メダウの教授法』を出版し、彼の体操の理論と指導法を明らかにした。そのなかで、彼は体操の目的として次の3つの柱をたてている¹⁶⁾。健康 (Gesundheit)、よい形態と姿勢 (der guten Form und Haltung)、そして、目的に適した洗練された動き (der sinnvollen und kultivierten Bewegung) であ

る。

これらの目的を達成するために、彼は教材を次の4つの項目にまとめ、体操を体系づけている¹⁷⁾。

(1). からだづくり (Körperbildung)¹⁸⁾

器官体操——呼吸と姿勢の修練

(2). 動きづくり (Bewegungsbildung)¹⁹⁾

基本運動 (歩く、走る、振る、跳ぶ、そして、はずむ) から始めて、その変化、発展
手具を補助として

(3). 動きのゲシュタルトウング

(Bewegungsgestaltung)

基本運動を形態、空間、時間、力動性などの観点から変化、発展させ、組み合わせる
フォークダンスや社交ダンスからの一連の運動やモチーフを用いて

(4). 運動技能 (Bewegungsleistung)

技能は目標ではなく、成果として

そして、体操の研究領域として、彼は次の7つを挙げている²⁰⁾。

- ・基本運動 (Grundformen der Bewegung)
- ・姿勢教育 (Haltungserziehung)
- ・動きの発展 (Bewegungsentwicklung)
- ・空間における動き (Bewegung im Raum)
- ・動きのゲシュタルトウングとダンス
(Bewegungsgestaltung und Tanz)
- ・器官体操 (Organgymnastik)
- ・動きの発展の基本型 (Grundformen der Bewegungsentwicklung)

2. ドイツ体操の研究領域とメダウの体操の研究領域

ここでは、メダウが挙げたこれらの体操の研究領域をドイツ体操のそれと比較してみる。まず、メダウの「姿勢教育」²¹⁾、「器官体操」²²⁾ は、ドイツ体操の「姿勢修練」の展開と捉えられる。メダウはこれら2つのうち特に器官体操を、呼吸に注目し医学者・生理学者の研究の援助を受けてまとめた。彼は、この器官体操を「からだづくり」の課題のなかで扱っているが、器官体操を特に重要

なものとして強調し、それから「動きづくり」へと発展させることのできる最も基礎的なものであるとしている。この器官体操は、体操改革運動当時のメンゼンディーク等の呼吸体操²³⁾の流れを汲むものとみることができる。

次に、「動きづくり」については、ドイツ体操の「動きの基礎修練」、「動きの発展」、「動きと手具」を受け継ぎ、メダウは「基本運動」、「動きの発展」、「空間における動き」、「動きの発展の基本型」とした。これは、ポーデの表出体操やラバンのダンス的体操の流れを汲む、リズムカルな「動きの修練」、すなわち「動きづくり」を課題にするものである。手具体操については、メダウもまた「動きづくり」の補助としてボール、棍棒、輪などの手具を用いたのであるが、彼はそれと運動技能や芸術性の追求を結びつけ、全く新しい分野、すなわち新体操競技への道を開いた。

そして、ドイツ体操の「動きのゲシュタルトウング」をメダウは「動きのゲシュタルトウングとダンス」として受け継いだ。これについてメダウは次のように説明している。動きのゲシュタルトウングについては、「生の衝動や躍動としての自己表現や内面化に関わる形成的な活動であることが重要である」²⁴⁾として、リズム、力動性、緩急法、空間・時間・力、音や色、光と影、緊張と弛緩等々の関連で、「ゲシュタルトウングの法則を追求し」²⁵⁾、「ひとつの全体を形成しようとする」²⁶⁾ものである。

これらのことからわかるように、体操改革運動、ドイツ体操、そしてメダウの体操へと続く、新しい体操諸派の活動は、シュピース＝マウル方式の体操や形骸化したスウェーデン体操の部分運動の組み合わせによる「からだづくり」(Körperbildung)の体操から、リズムカルな「動きの修練、動きづくり」(Bewegungsschulung, Bewegungsbildung)へとその重点を大きく移していったのである。そのような流れのなかで、「動きのゲシュタルトウング」という言葉は、常にこの「動きの修練、動きづくり」とともに用いられてきたが、具体的な説

明はされてこなかった。

この「動きのゲシュタルトウング」は、60年代になって再び注目されるようになり、第4回体育専門家会議のテーマに取り上げられた。

Ⅲ. 「課題としてのゲシュタルトウング (Gestaltung)」について

1. ゲシュタルトウングについて

1967年10月4日～7日にシュトゥットガルトで開催された第4回体育専門家会議(IV. Kongress für Leibeserziehung 4. -7. Oktober 1967 in Stuttgart)は「ゲシュタルトウング」をテーマにして行われた。

O.F.ボルノー(Otto Friedrich Bollnow, 1903 - 1991)²⁷⁾は、その会議の初日に「課題としてのゲシュタルトウング (Gestaltung)」という講演を行った。これは同名の論文として会議の報告書に掲載されている。彼は、この論文のはじめに、「哲学的な立場から、ゲシュタルトウングの概念を明らかにし、人間の生の包括的な関連におけるその意味を特徴づけ、身体運動の領域におけるその機能を体育の視点から明確にする」²⁸⁾という課題を担うと述べている。

そして、彼は、次のように論を展開している。「ゲシュタルテン (gestalten) は、形を与える、的確な方法で形づくることを意味し、…(中略)…ゲシュタルトウング (Gestaltung) は、主としてその過程と理解され、形づくられたものがゲシュタルト (Gestalt)²⁹⁾であると考えられる」³⁰⁾。「ゲシュタルトウングは、初めは空間的な形成物であった。これを最初に時間的な事象に用いたのがゲシュタルト心理学³¹⁾であった。それ以後、ゲシュタルトはメロディーなど、時間的領域でも言われるようになり、そして動きのゲシュタルトウングも問題にされるようになった。」³²⁾ゲシュタルトウングという言葉は「20世紀初めの芸術教育運動³³⁾やそれを方向づけた生の哲学³⁴⁾などの精神史的な文脈のなかにある」³⁵⁾。「その後、特に近年(20年代以来)しばしばこの語が用いられるようになってきている。そのことから、人間

のより深い欲求がその基礎にあるということが推測される。』³⁶⁾ O.F. ボルノーは、このようにゲシュタルトウングの欲求、願望に言及し、「この新しい欲求を言い表すためにはこれまで使われてきた形成 (Formung) や陶冶 (Bildung) では十分ではない。』³⁷⁾ と論を進めている。

さらに、彼は、このこれまで使われてきた言葉を越え出て、それでは表しきれない欲求に関わる言葉としてゲシュタルトウングを次のように説明している。「ゲシュタルトウングは、生存をめぐる闘争において必死で我が身を守るような状況ではその展開の余地をもたず」³⁸⁾、また「必要性 (目的) と関心によって決定されるような労働の世界でも起こり得ない」³⁹⁾。「それは、それらを越えた自由の余地のあるところで、初めて美しく、好ましい形の可能性を育てる」⁴⁰⁾。「ゲシュタルトウングは、合理的に形成された生活世界の制約を越えて、より高い自由へと人々を導くようなものである。私たちが道端で摘み取り、部屋のコップにさす花は、まったく必要なものではなく余計なものである。しかし、それでもって私たちは必要性の領域を越えて生活を引き上げる。ここに、私たちは重要な内的衝動をみてとることができる。より深い意味におけるゲシュタルトウングは常に同時に祝祭的なゲシュタルトウングであり、生活を祝祭へと高揚させる。生活は、退屈な習慣的日常へと沈下するだけでなく、合目的・理性的な行動の領域を越えて、私たちが祝祭という概念で言い表すような華やかな、より高い領域へも昇る。』⁴¹⁾

2. 動きのゲシュタルトウングについて

そして、O.F. ボルノーは、「動きのゲシュタルトウング」のゲシュタルトウング (Gestaltung) について、形成 (Formung) や陶冶 (Bildung) と区別した。彼は、Formung について、工業製品の生産を例に挙げ、計画的・意図的に設計されたFormungには、ゲシュタルトウングの余地はない⁴²⁾ としている。また、Bildungについては、教育学の領域で使われるよ

うになった言葉である⁴³⁾ としている。教育的意図をもつ体育におけるBildungは、目的運動や表出運動を通して実現されるというのであるが、どちらも教育的意図、目的や表現の意図をもったときにゲシュタルトウングの可能性をなくしてしまうと、次のように説明している。「随意運動あるいは目的運動は、例えばハンマーで壁に釘を打つ、あるいは鋤きで庭を掘りおこすときのように、実践的な目的の達成に役立つ。この目的運動は、その目的によってまったく明確である。それは、その目的をもっとも簡単に力を節約した方法で達成しようとする。… (中略) …この目的運動は、出来映えがよりよくなればなるほど、より一層直線的に、より端的にその目的を達成する。それゆえ、この意味において、この目的運動は、練習して覚え込まれ、改良される。それは、合目的性を追求して、意識的に、完全に形づくられ、合理化され、そして固定化され、自動化される。そして、それは習得された巧みな動きになる。… (中略) …目的運動は、確かに目的にかなって形成され、その全体の正確さにおいて作り出されるが、そこにはゲシュタルトウングはありえない。… (中略) …たとえ、目的運動が美しいとしても計算された法則から純粹に実現されたもので、根源的なゲシュタルトウングの成果としてでなく、技術の美という意味においてそうなのである。』⁴⁴⁾ また、「これに対して、表出運動は、そのなかに内的な状態が、思わずしばしば当該者の意志に反して現れるような動きである。それは、それ以外に、それを達成しようとするような目的をもたず、それ自体のなかに実現する。それは、怒りをこめた拳骨のなかに、あるいは好意的な微笑みの容貌の無意識な動きのなかになど、身振りや動作のなかに現れる。そのような表出運動は、意識的な制御から自由になりどんな意図にも歪曲されない。まさに、それゆえ、当該の人間の情緒をとらえるのに特に適している。… (中略) …しかし、表出運動もまた常にゲシュタルトウングの可能性をもっているわけではない。いや、表出運動は、自らその可能性を閉め出す。なぜなら

ば、表出は無意識に生じ、何かの意図、ゲシュタルトウングの意図でもそれが介入するやいなや、表出は歪められる。表出が一度形になると、それはもはや直接の表出ではなくなり、他の人や観客に伝え示されるべき表出の再現になる。このようなとき、私たちは演劇や芸術ダンスの領域に入るが、しかし、そこでは純粋な表出の段階をすでに離れてしまっていることになるのである。⁴⁵⁾ 同時にゲシュタルトウングからも離れてしまうというのである。

そして、具体的な動きについては、この会議の2日目に予定されているグルーペ (O. Grupe) の講演⁴⁶⁾ でより詳しく述べられるであろうとしながらも、O.F.ボルノーは、採点競技、運動の実施における姿勢、ステップなどに言及している。特に、ステップについては、次のように述べている。「ステップを踏むこと (Schreiten) は動きのひとつの祝祭的形態である」⁴⁷⁾。直立歩行やステップの際には、「何か人間に特有なものがそのなかに現れる」⁴⁸⁾。「明らかに、祝祭的な動き (feierliche Bewegung) と動きのゲシュタルトウングとは密に関連している」⁴⁹⁾。このようなステップは、「表出でもなく目的の決められた動きでもない。それは、また、何かを表現する演技でもない。それはむしろ、そのゲシュタルテンの法則を全くそれ自体にもつような動きである。」⁵⁰⁾

「動きのゲシュタルトウングは、それが一度始まると、望むか望まないかにかかわらず、必要性を越えて祝祭へ駆り立てられる。なぜならば、ただ祝祭においてのみ、それが実現されるからである。」⁵¹⁾「祝祭はただの楽しみではなく、生の充実である。祝祭においてのみ、生はその完璧さに至る。このことによって、身体の動きのゲシュタルトウングは教育的意義を獲得する。これは、ただ体育だけの問題なのではなく、日常生活の単調な分別を克服して祝祭に至る、そして神々しいものと出会う、その神々しきで生を満たすひとつの方法である。『課題としての動きのゲシュタルトウング』⁵²⁾ は、この点に立脚するものである。」⁵³⁾

3. 「動きのゲシュタルトウング」の特徴について

O.F.ボルノーは、「『動きのゲシュタルト』』という、まず、個々の動きの局面が統一的な調和に向かう全体的な形態 (Form) が思い浮かぶ」と述べ、そこから「動きのゲシュタルトウング」についての特徴を読み取ることができるとして、次の4つの特徴⁵⁴⁾ を挙げている。

- (1). はっきりとした始めと終わりがある、背景からは際立ち、全体としてまとまった有機的な動きの流れが、豊かな形をもつ (gestalthaft)。
- (2). 動きのゲシュタルトウングは、人間の動きの完璧なゲシュタルトへの意識的な形成 (Formung) である。
- (3). 動きのゲシュタルトウングは、常に、既に存在するまだゲシュタルトされていない、あるいは少しだけしかゲシュタルトされていないような動きを後から改良するものである。それは、常に、既にある動きの形成 (Formung) を越えるもの (Überformung) である。
- (4). 動きのゲシュタルトウングは、個々の動きの細部に至るまで完全に形づくることではない。とりわけ外から来る法則に従属されるようなものではない。まだゲシュタルトされていない動きのなかにあるゲシュタルトウングの傾向を慎重に取りだし、それを必要性の制約を越えておこる自由な完成へと導く。

そして、彼は、次のようにまとめている。「動きのゲシュタルトウングは、動きの細部に至るまで完全に形づくることではなく」⁵⁵⁾、「成果や出来映えを達成すること」⁵⁶⁾ でもない。「それは、すべての目的制約を越えて、自由に流れるように展開する身体の動きにおいて、生命がすべての必要性を越えて、崇高で、自由で、軽やかになり、そして、そのようななかで楽しむという感情、独特な幸福感を得る」⁵⁷⁾。そして、最後に、「美しく展開する動きのこのようなゲシュタルトウングは、孤立した個人だけではうまく成り立たない。確かに個人個人は孤独でも粘り強く練習することは

できる。しかし、ゲシュタルトウングの喜びは連帯を求める。美しい動きに楽しそうに目を向ける観客の視線を求めるのである。⁵⁸⁾

おわりに

以上みてきたように、リズムカルな動きの修練、動きづくりに重きをおく体操は、「動きの基礎修練」、「姿勢修練」、「動きの発展」を通してそれを実現させようとするものである。その最後に、修練や陶冶 (Schulung, Bildung) の意図、意志を越えた「動きのゲシュタルトウング」がある。O.F.ボルノーによると、これは動物にはない極めて人間的なものであるが、意図や意志すなわち知的精神にコントロールされるものではなく、ゲシュタルトウング以外の目的をもたないものである。動きのゲシュタルトウングにおいて目指されるものは、豊かなゲシュタルトをもつ全体としてまとまった有機的な動きの流れで、人は常にそれをより完璧にしようとする。

このように体操の動きの修練の最後に醍醐味のひとつとして動きのゲシュタルトウングがあり、これは共演や体操祭の発表のなかで完成される。このことから、今日、ヨーロッパを中心に世界的な規模で行われているギムナストラダ (Gymnaestrada) 等の体操祭も、ただ練習の成果を発表すること以上のもので、動きの修練を完成させるための重要な場であることが示唆される。

注および引用・参考文献

- 1) クルト・マイネル著 (1960年)、金子明友訳、『マイネル スポーツ運動学』、1981年、436頁の「体づくり体操」のところで、金子明友も、シュピース等々の体操に対して次のように述べ、批判している。「マイネルが Stilisierung (鋳型化)、Konstruierung (構成化)、Elementarisierung (要素化) の三大特徴を体育における過去の運動認識として指摘していることは、われわれにとって大いに示唆に富むものと考えられる。」
- 2) 拙稿「『ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik)』に果たしたルードルフ・ボーデの貢献について」、『スポーツ史研究』第26号、1-16頁、2013年。
- 3) Hilker, F., Deutsche Gymnastik, Bibliographisches Institut: Leipzig, 1935.
- 4) 拙稿「ドイツ体操同盟の成立に果たしたF. ヒルカーの役割について」、『スポーツ史研究』第24号、1-14頁、2010年。
- 5) 「動きのゲシュタルトウング (Bewegungsgestaltung)」には、これまで異なったいくつかの訳語が当てられてきている。例えば、クルト・マイネル著 (1960年)、金子明友訳、『マイネル スポーツ運動学』、1981年、437頁やペーター・レーティツヒ編 (1972年)、岸野雄三日本語版監修：『スポーツ科学事典』、プレス ギムナスチカ、1981年、38頁で、金子明友は、運動の構成に関する運動想像力の成果として Bewegungsgestaltung を運動創作と訳している。エリッヒ・バイヤー編 (1987年)、朝岡正雄監訳：『日独英仏対照スポーツ科学辞典』、大修館書店、1993年、12-13頁では、渡辺伸が、フォーム (美しさ、難しさ、調和) の達成を課題とする運動に関するものとして、Bewegungsgestaltung を「動きづくり」と訳している。また、板垣了平は、体操の特性に基づく指導法 (その1)、健康と

体力、第4巻第7号、80-83頁、(1972年)で Bewegungsgestaltung を運動構成と訳している。

- 6) Bollnow, O.F., Gestaltung als Aufgabe, In: "Die Gestaltung" IV. Kongress für Leibeserziehung 4.-7. Oktober 1967 in Stuttgart, Verlag Karl Hofmann, 1967, S.17-38.
- 7) Medau, H., Medau, S. und Holler-von der Trenck, J., Moderne Gymnastik—Lehrweise Medau, Pohl-Druckerei und Verlagsanstalt, 1967. S.1-224.
- 8) F. ヒルカーは、1925年に「ドイツ体操同盟 (Deutscher Gymnastikbund)」を設立し、この同盟の活動を通して、新しい体操の諸派を強く結びつけていった。このドイツ体操同盟は、ナチス (国民社会主義) の政府によって1933年に解散させられ、また他の多くの体育・スポーツの組織も解散させられて強制的にひとつの新しい団体、「ドイツ帝国体育・スポーツ・体操教師連盟 (Reichsverband Deutscher Turn-, Sport- und Gymnastiklehrer e.V.)」に統合された。ヒルカーは、その連盟で自発的に体操部門の事務長として働いている。そのような状況のなかで、ヒルカーは1935年に彼の体操研究の集大成である『ドイツ体操』を著した。その出版に当たりナチス党の体育担当官の許可を得なければならなかったが、冊子の初めの部分に「新しいドイツの国民国家において、…」という文章を加えることによって、新刊の許可を得たと、彼は自ら語っている (Radde, G., Aus dem Leben und Wirken des entschiedenen Schulreformers Franz Hilker (1881-1969), In: Peter Drewek (Hrsg.): Ambivalenzen der Pädagogik. Zur Bildungsgeschichte der Aufklärung und des 20. Jahrhunderts. Harald Scholtz zum 65. Geburtstag, Deutscher Studienverlag: Weinheim, 1995, S.164.)。

『ドイツ体操』全体に、今日ではナチ用語として辞書で解説されているような単語も散見される。例えば、völkisch (民族主義的な)、Volksgemeinschaft (民族共同体)、Volksgenosse (民族同胞) 等である。これらからも時代背景をはっきりと見て取ることができる。特に「ドイツ人」ということが強調されており、ヒトラー政権下で出版をするための配慮も加わったものかとも思われる。しかし、確かに「ドイツ人」が強調されているのではあるが、注意深く読んでいくと、その底に流れているのは人間に普遍的なテーマであることがわかる。ドイツ体操の骨子、すなわち「ドイツ体操の研究領域」は、20年代からの体操改革運動のなかで組み立てられたものであるから、ナチスのイデオロギーに影響されたものではないと考えられる。

- 9) Hilker, F., a.a.O. S.28.
- 10) ebd., S.25-26.
- 11) ebd., S.72-75.
- 12) 拙稿「『ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik)』に果たしたルードルフ・フォン・ラバンの貢献について」、『スポーツ史研究』第25号、1-15頁、2012年。
- 13) 例えば、Der Reichsverband deutscher Turn-, Sport- und Gymnastiklehrer e.V., Deutsche Gymnastik, Wilhelm Limpert Verlag: Berlin, 1935.がある。1933年に、ドイツ体操同盟はナチス (国家社会主義) の政府によって解散させられ、また他の多くの体育・スポーツの組織も解散させられて強制的にひとつの新しい団体、「ドイツ帝国体育・スポーツ・体操教師連盟 (Reichsverband Deutscher Turn-, Sport- und Gymnastiklehrer e.V.)」に統合された。F. ヒルカーは、その連盟で自発的に体操部門の事務長として働いた。そして、彼は1935年に彼の体操研究の集約である『ドイツ体操』を著した。R. ボーデも、この同盟の設立以来、「体操とダンス」の部門の指導を

引き受け、体操教授法の統一を図ろうと努力した。その努力の結果、やはり1935年に、この連盟の叢書の第1号として『ドイツ体操』が出版された。この『ドイツ体操』は、ヒルカーの『ドイツ体操』とは別の小冊子である。しかし、この『ドイツ体操』にも、ヒルカーの体操の5つの研究領域（動きの基礎修練、姿勢修練、動きの展開、動きと手具、そして動きのゲシュタルトウング）が、そのまま踏襲されている。そのなかで動きのゲシュタルトウングについては、次のように述べられている。「地域社会の生活や年祭りのゲシュタルトウングにおいて、パレード、輪舞、運動遊戯、民俗舞踊を通して、人間の本来もつ能力が発揮される。これらの自由な動きのゲシュタルトウングの形態は、それぞれの体操の教授法において、それぞれ育成されるものである。」

また、1923年の著者による序文がある Klages, L., *Ausdrucksbewegung und Gestaltungskraft, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1968.* や Bode, R., *Bewegung und Gestaltung, Widukind-Verlag, 1936.* 等にも、ゲシュタルトウングについての記述があるが、いずれも難解である。

- 14) L. クラーゲスは、『リズムの本質について』第4版 (Klages, L., *Vom Wesen des Rhythmus*, 4. Aufl., Bouvier Verlag : Bonn, 2000., S.30-31.) で、次のように述べている。「あらゆる概念は、2つの種類の判断、すなわち、把握的判断 (begreifendes Urteil) と指示的判断 (hinweisendes Urteil) の基礎となりうる。前者は思考対象に、後者は直観世界に関係する。」リズム、表出、ゲシュタルトウングなどにおいては、体験や直観が重視され、これらについては、L. クラーゲスのいう指示的判断の基礎となる概念で語られる。それゆえ、難解なのであると思われる。
- 15) H. メダウ (Hinrich Medau) は、北部ドイ

ツのシュレスビツヒ-ホルシュシュタイン州に生まれた。子ども時代、彼は、旅回りのサーカスや祭りや年の市を好んだ。そのようななかで、音楽、民謡、民俗舞踊や賛美歌に影響を受けた。彼は、音楽家になろうとした。しかし、彼の両親に反対され小学校教師の養成課程に通った。終了後、彼は3年間リスボンのドイツ人学校で教鞭をとった。そこでは公使館教会のオルガン奏者も勤めた。その後マドリッドに移った。その当時、彼は、R. ボーデの『リズムと身体教育』を読み、強く感銘を受けた。そして、ミュンヘンのボーデのところで勉強するため帰国した。ボーデの体操学校で学士号を取得した後、さらにミュンヘン大学やベルリン大学で学んだ。ボーデのもとで、彼は、7年間、講習や講演そして実演会を通して、リズムカルな運動修練の普及に努めた。1925年のドイツ体操同盟の結成当初は、ボーデ体操学校の代表としてその同盟の副議長を務めた。彼は、国内だけでなく、海外にも招聘され、1928年にはニューヨークのコロンビア大学で夏期講習を行った。その頃ニューヨークではバスケット・ボールのゲームが盛んに行われ、メダウの目にもとまった。それが切っ掛けとなって、後に彼はボール体操を考案することになる。ドイツに帰国後、1929年に、彼はボーデの学校から独立し、体操女教師養成所、メダウ学校をベルリンに設立した。その後、メダウによって指導される学校は、1943年にはブレスラウに、1948年にはフレンスブルクに、1954年にはホーエンフェルス城に建てられた。彼に影響を与えた人物としては、R. ボーデの他、スイスのリズム教育家 E. ジャック＝ダルクローズ、生命哲学者 L. クラーゲス、そしてミュンヘンの呼吸器科の医師 L. シュミットが挙げられる。

- 16) Medau, H., Medau, S. und Holler-von der Trenck, J., a.a.O.S.112.
- 17) Rothenberg, G., Hinrich Medau zum

- 75.Geburtstag, Leibesübungen 5, S.3-7.,1965.
- 18) 板垣、前掲論文、80-83頁で、Körperbildungに「からだづくり」、Körperformungに「身体形成」の訳語が用いられている。また、クルト・マイネル著、金子明友訳、前掲書、436頁では、Körperschuleに「からだづくり体操」の訳語が用いられている。
- 19) 板垣、前掲論文、80-83頁では、Bewegungsschulungに「運動学習」、Bewegungsbildungに「動きづくり」の訳語が用いられている。また、ペーター・レーティツヒ編、岸野雄三日本語版監修、前掲書、39頁で、金子は、Bewegungsbildungに「運動づくり」の訳語を当てている。そして、この項目には次のような記載がある。「元来は体操改革運動の中に現れたこの概念は、今日では体育 (Leibeserziehung) の重要な陶冶課題を表している。運動づくりの概念は運動の中に現れる、運動のために行われる個人的行動、基本運動、行為を意味する。『運動-個体』(Streicher) としての活動は変化するものであるので、運動づくりは測定可能な、また評価可能な達成力の向上にも、運動創作 (Bewegungsgestaltung) の領域にももち込むことができる。〔注〕運動づくりは運動訓練 (Bewegungsschulung) と運動形成 (Bewegungsformung) を含む。」
- 20) Medau,H.,Medau,S.und Holler-von der Trenck,J., a.a.O.S.120-144.
- 21) ebd.,S.129-130.
- 22) ebd.,S.62-70.,138-143.
- 23) Diem, L., Die Gymnastikbewegung, Academia Verlag, 1991, S.48-52.にメンゼンディークの呼吸体操に関する記述がある。それによると、メンゼンディーク (Mensendieck,B.) とカルマイヤー (Kallmeyer,H.) は、ステバン (Stebbins,G.) に学び、体操の基本要素として「呼吸、弛緩、緊張」を受け継いだ。また、カルマイヤーに学んだギンドラー (Gindler,E.) も呼吸に重点をおいた指導を行った。そして、メダウ (Medau,H.) は、Medau,H.,Medau,S.und Holler-von der Trenck,J., a.a.O.S.58-59.で、メダウの器官体操の成り立ちを説明しているが、その際影響を受けた体操家としてギンドラーに言及している。
- 24) Medau,H.,Medau,S.und Holler-von der Trenck,J., a.a.O.S.137.
- 25) ebd.
- 26) ebd.
- 27) O.F.ボルノー (Otto Friedrich Bollnow) は、シュテティンに生まれ、チュービンゲンで死去、チュービンゲン大学名誉教授 (哲学および教育学)、創立以来1968年までドイツ教育学会会長を務めた。哲学的ならびに教育学の人間学、認識論および解釈学に関する多数の著書があり、諸外国語にも翻訳されている。(天野正治、著者略歴、H.レールス/H.ショイアール編：『現代ドイツ教育学の潮流』、玉川大学出版部、1992年、489頁。)
- 28) Bollnow,O.F., a.a.O.S.17.
- 29) 市川浩、ゲシュタルト、山崎正一・市川浩編：『現代哲学事典』、講談社、1970年、207-209頁によると、次のように説明されている。「形態と訳する。メロディのように内的分節をもった有機的全体構造をいい、その部分は全体に従属し、かつ互いに他に依存し合っている。」歴史について、「連合主義は、あらゆる心理現象を要素的な感覚の連合として理解した。しかしエーレンフェルスは、メロディーは個々の音の総和以上の新しい質をもっていると考え、それを形態質〔独〕 Gestaltqualitätとなづけた (1890年)。形態質は要素から独立した全体的構造であるから、他の要素からなる同じ構造の形態質に移調することができる。例えばあるメロディーを一オクターブ上に移しても印象はかわらな

い。ヴェルトハイマー、ケーラー、コフからは、1910年代にこの考え方をおしすすめて、要素の総和につけ加わるプラス・アルファーとしての形態質ではなく、意識されるがままの第一次的な所与としてのゲシュタルトの概念を提唱した。そして連合主義に含まれていた三つの仮定——心理現象は要素の加算であるというモザイク仮定、要素としての感覚は外界の刺激と常にきまった一対一の対応関係にあるという恒常仮定、要素の連合によって心理現象が成立するという連合仮定——を否定した。」また、哲学との関係では、「ゲシュタルトの考え方は、要素論と全体論、機械論と力動論、経験主義と先天主義、心身二元論と一元論など、伝統的な哲学的問題とからんで、多くの論争をひき起こした。ゲシュタルト心理学の創始者たちは、同じくブレントノー学派に属するフッサールと直接間接に接触があり、ゲシュタルト心理学は、多くの点で現象学と共通の性格をもっている。フッサールは両者の差異を強調したが、メルロ＝ポンティはゲシュタルトの概念を哲学的に再検討し、この概念がもつ現象学的真理をさらに徹底化しようとした。」

30) Bollnow, O.F., a.a.O.S.18.

31) 大山正、心理学史——現代心理学の生い立ち——、サイエンス社、2010年、173頁によると、「19世紀においては、自然科学の世界でもドールトンの原子論や生物学における細胞説など、要素の集まりとして、全体を理解する風潮が強かった。心理学でも、19世紀には連合主義の心理学では観念連合として、またヴントらの心理学においては心理要素の集まりとして意識を考える構成主義として、要素論が主流を占めていた。これに対して、20世紀初頭にドイツに現れたゲシュタルト心理学は、『全体は単なる要素の集まりではない』という全体論の立場に立って、心理学に新風を与えた。その後ゲシュタルト心理学者の多くはナチスに追われ、アメリカに移動してア

メリカ心理学に大きな影響を与えた。とくに我が国においては、昭和初期に紹介されて以来、心理学会に強い影響を与えている。」

32) Bollnow, O.F., a.a.O.S.29.

33) 芸術をテーマに第1回芸術教育会議が1901年にドレスデンで催された。第2回は文学をテーマに1903年にヴァイマルで、そして第3回は音楽と体操をテーマに1905年にハンブルクで開催された。これらの会議では当初から芸術教育が広義に捉えられ、生の形式の意義が深く洞察され、議論された。

34) 柴野博子、生の哲学、山崎正一・市川浩編：『現代哲学事典』、講談社、1970年、386-387頁によると、生の哲学は、「絶えず創造して行く生き生きとした生、また知情意を合わせ持った具体的な生を、生そのものに即した非合理的な方法によってとらえようとする現代哲学の一潮流。その淵源はショーペンハウエルにまで遡るが、これを代表するのはニーチェ、バルグソン、ディルタイ、ジンメル等である。…(中略)…生の哲学は、生そのものをとらえようとする限り正しい意図を含んでおり、また批判哲学よりも豊かな内容を持っているが、その非合理的な認識を如何にして学問的な認識にまで高めるかが残された問題であろう」と紹介されている。

35) Bollnow, O.F., a.a.O.S.19.

36) ebd., S.17.

37) ebd., S.19.

38) ebd., S.26.

39) ebd., S.25.

40) ebd.

41) ebd., S.28.

42) ebd., S.24.

43) ebd., S.19.

44) ebd., S.30.

45) ebd., S.30-31.

46) Grupe, O., Bewegung und Bewegungsgestaltung in pädagogischer Sicht, In: "Die Gestaltung" IV. Kongress

für Leibeserziehung 4.-7.Oktober 1967 in
Stuttgart, Verlag Karl Hofmann, 1967,
S.39-56.

- 47) Bollnow, O.F., a.a.O.S.35.
- 48) ebd., S.36.
- 49) ebd., S.35.
- 50) ebd.
- 51) ebd., S.37.
- 52) 「課題としてのゲシュタルトウング」は、本研究で「動きのゲシュタルトウング」を理解するための手掛かりとしたO.F.ボルノーの論文のタイトルである。彼は、人間の生の包括的な関連におけるその意味を特徴づけ、身体運動の領域におけるその機能を体育の視点から明確にするとして、この論文の最後で、課題としてのゲシュタルトウングを生の充実とし、そこに教育的な意義を見いだしている。しかし、これは全体の論旨である「ゲシュタルトウングは、それ以外の意図や目的から自由であること」と矛盾しているように思われる。60年代という時代の要請、すなわち科学的合理性や有用性を重んじる時代の精神ともいべきものの影響があるのか、今後の課題として慎重に検討したい。
- 53) Bollnow, O.F., a.a.O.S.38.
- 54) ebd., S.29.
- 55) ebd., S.28.
- 56) ebd., S.32.
- 57) ebd., S.33.
- 58) ebd., S.34.